

ハンセン病問題の解決に向けて

ハンセン病回復者の思い

私は伊賀市で生まれ育ちました。12歳の時に邑久光明園に入所しました。故郷について思い出されるのは、路地裏で遊んでいたこと。そして、上野城や上野公園がすぐそばにあり、いつもその美しい姿を見ていたこと。そんなことが今でも心に残っています。

結婚と同時に療養所を出て大阪で暮らし始めました。十数年、必死で働き、貧しかったけれど、充実した生活を送っていました。しかし、病が再発し、再入所することになりました。勤め先や友人に病気のことや移転先のことを明かすことはできず、その人たちとの大切な関係を自ら断つこと

私は三重県に生まれ、13歳の時に長島愛生園に入所しました。それから75年、ここで暮らしてきました。昔、入所者の友と一緒に、コーヒーを飲もうとある店に入った時、私たちには飲ませてくれなかったことがありました。本当に悔しく

体には後遺症がありますが、自分がしたいことをしたいと思い、パソコン教室に通いました。以前はそのような勇気は持てなかったと思います。

は、本当に辛く、苦しかったです。まだまだ自分の病のことを話せるような社会ではないと感じていたからです。

しかし、邑久光明園に戻ってきて、驚いたことがありました。地元の人たちが、多く園に携わっていることでした。以前は、医師や看護師以外では、地域の人を見ることはなかったからです。多くの人たちが、療養所の生活の改善、回復者への偏見や差別をなくしていこうと、運動を続けてきたからだと思っています。



邑久光明園
榎本初子さん

て、たまらなかったです。

長島愛生園を訪れる人がとても多くなってきています。そのように私たちのことを正しく知ってもらうことが、本当に大切だと思っています。

長島愛生園 川北為俊さん

そう思えるようになったのは、徐々にではあるけれど、私たちに対する人々の意識が変わってきていると感じたからです。

長島愛生園 川北為俊さんの妻

市民と共に考える活動～絶たれたつながりの回復を～

平成21年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が制定されましたが、現状は何も変わっていないと感じていました。自分たちにできることは何かないだろうかと思い、平成22年に「ハンセン病問題を共に考える会・みえ」を立ち上げました。ハンセン病回復者の芸術作品展などを行い、ハンセン病回復者が絶たれた家族や社会とのつながりを回復するために活動しています。

活動を続けてきたことで、この問題について関心を持ち、共に考えていこうとする人が増えてきています。子どもたちと共に学び、考えていこうとする学校の先生も増えました。また、いろいろな地域で住民の皆さんに話すことも増えてきまし

た。ハンセン病回復者の思いやこれまでの歴史などを話すと「新たに知ったことや学んだことを、自分も周りの人に伝えていきたい」と話してくれる人も多くいます。回復者が高齢化する中、直接交流することを通して、問題の解決に向けて考える人を増やしていくことも続けていきたいと思っています。

活動を続けてきたことで「共に考える」人の輪は確実に広がっていると感じています。私自身、ハンセン病問題の本質は「排除」と「孤立」だと思っています。回復者だけでなく、その家族にも「排除」と「孤立」をさせ続けてきたのは、社会にいる私たち一人一人だということを忘れてはならないと思っています。

ハンセン病問題を共に
考える会・みえ共同代表
岩脇宏二さん

